日本の物語文学 ――その発生――

年組氏名

鎌倉時代	平安時代

作り物語

竹取物語

（成立時期は、九世紀から十世紀初め。作者不詳。）

日本最古の物語。わが国や外国の伝説・説話が材料になっていると思われる。竹の中から見つけられた三寸ほどの光り輝く女の子が三か月の間に美しく成長するなど、超現実的な要素を持っている。

伊勢物語

（作者と成立時期は不詳。在原業平の物語ともいわれる。）

昔、男、初冠して、奈良の京、春日の里に、領るよしして、狩りに往にけり。

昔、一人の男が初めて冠をかぶる儀式、つまり元服（成人式）をして、奈良の春日の里に領地をもっていたので、そこに狩りに出かけた。

『伊勢物語』の書き出しは、このように始まる。一二四段から成り、どの段も「むかし男ありけり」あるいは、「昔、男」と書き出され、全体が一人の主人公で統一され、元服から臨終にいたる事件をからませて、伝記のようになっている。物語は、筋の展開を示す地の文と、和歌によってつづられているので、歌物語と呼ばれる。

第一段は、春日の里で見つけた姉妹に心を奪われ、紫草の染料で染めた模様さながらに心が乱れたと次の歌を贈ったという話である。

春日野の若紫のすり衣
しのぶの乱れかぎり知られず

源氏物語

（十一世紀初めに成立。紫式部作。）

いづれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめよりわれはと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。

何帝の御代であったか、女御・更衣などのお妃がたがおられた中に、それほど身分の高いほうではないかたで、帝に愛されて格別羽振りのよろしいかたがあった。最初から我こそはと宮中に上ったお妃がたは、そのかたを癪にさわるかただとおとしめ嫉妬なさった。

源氏物語の冒頭であるが、帝に愛されたこの女性に生まれた皇子光源氏が、この物語の主人公である。この皇子は、容姿・才能とも抜群であったが、父帝は、将来を考え、臣下の身分とされた。物語は、亡き母の面影を慕う光源氏の多くの女性との恋愛や、宮廷での出世競争などを中心に、貴族社会の日常生活が写実的に描かれている。五十三帖から成り、多数の人物が登場する。後の文学にも影響を及ぼし、近代の多くの小説家たちが、これを熟読し、現代語に訳している。日本の古典文学の傑作とされる。

説話物語

事実として口頭で語られてきたこと、または事実と信じられて語られてきた話をつづったもので、最も古いものは、『日本霊異記』とされる。仏教との関係も深い。

今昔物語集

（十二世紀成立。作者不詳。）

千編を超える話を収め、話は、天竺（インド）、震旦（中国）、本朝（日本）にわたっている。すべての話が「今は昔」で始まっているのでこの名がある。近代の小説家芥川龍之介は、この作品や、次の『宇治拾遺物語』などに題材をとって、知的に現代化した作品を書いているが、次の一節も、作品『羅生門』の題材となった話の部分である。

盗人、あやしと思ひて連子より臨きければ、若き女の死にて臥したるあり。其の枕上に火を燃して、年極く老たる嫗の白髪白きが、其の死にし人の枕上に居て、死にし人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。

盗人がおかしいと思って連子からのぞいてみると、若い女が死んで横たわっていた。その頭の上で、灯火を灯して、ひどく年老いた老婆が、枕元で死人の髪の毛を必死に抜き取っていた。

宇治拾遺物語

（一二二一年ごろ成立。編者不詳。）

『今昔物語集』と並んで、説話文学の代表作品とされる。『今昔物語』に採られている話もあるが、当時の人々の姿、生活ぶり、貴族や僧侶の失敗談など、平安時代の語り口のように平明、軽妙で生き生きと伝えている。「鬼に瘤取らるること」「雀報恩の事」などよく知られている話である。

歴史物語

藤原道長を頂点とする摂関政治が終わり、貴族中心の世の中が移り変わろうとする平安時代の末期に、貴族社会に対する思慕の気持ちや批判の念から歴史物語が書かれ始めた。

栄花物語

（平安後期の成立。）

仮名で書かれた最初の歴史物語で、道長時代の全盛時を回顧し、道長を光源氏にたとえて、ひたすら賛美して書かれている。編年体で、藤原家にゆかりのある女房によって書かれたとされている。

大鏡

（一一〇九年の成立。）

同じく藤原氏の栄華を描きながら、「鏡に照らしたごとく」過去の摂関政治を批判的にながめた書き方をしている点が、『栄花物語』と異なるところである。人物中心の紀伝体で書かれ、歴史上の諸人物の性格が生き生きと描かれていて、後の歴史文学に影響を与えた。

軍記物語

院政時代の後期（十二世紀後半）皇位継承と貴族の権力争いから保元の乱がおこり、ついで平治・治承・寿永の戦乱となったが、これらの戦乱の始終を題材とした文学が、軍記物といわれる作品である。

保元物語・平治物語

（十二世紀後半ごろ成立。作者不詳。）

平家物語

（十三世紀前半ごろ成立。信濃前司行長の作といわれる。）

琵琶法師によって語られるこの作品は、多くの人に親しまれた。平清盛を中心とする平家一門が、どのようにして栄華を極めるに至ったかを述べ、清盛やその近親者たちの悪業が語られる。そして、平家の子孫が、清盛らの悪業によって滅びるところで十二巻が終わる。様々な登場人物の生き生きとした姿が、栄枯盛衰の主題のもとにとらえられている。